

滋味あふれる沖縄の記憶



かいクリニック 稲田 隆司

誰にでも各々に心に残る記憶があると思う。

その記憶が今を励ます場合も、あるいはその痛切さが今も心にせまり突き動かす場合も、記憶は様々な人を誘い影響を与えている。

この本は、その見識と実践で地域精神医療を支えてこられた著者の心像に留まる記憶をめぐる物語である。同時にそれは、70数年に渡り沖縄を生き抜いた一人のウチナーンチュの活々とした時代の記憶でもある。

ゆうなの木陰でお年寄りが世間話をし、主婦達が集い、子ども達は木登り、コマ回しとまだのんびりとした昭和17年の首里の風景、「ゆうなの木陰はこうして歓喜の場であったが、夕餉のときが近づくとみんなが帰り、人影の絶えた木陰には静寂が戻ってくる。そしてそこには夜のしじまが訪れるわけだ。」

この一節で閉じられる始まりのエッセイは、やがて訪れる沖縄戦の暗転を示すかのようだ。あの歓喜はどこへ行ったのか。何者が奪ったのか。そして「対馬丸の僚船にて」と題する疎開学童・城間少年の不安、暗い洋上の暁空丸の甲板からみた大きな明かり、「船員が寄ってきた。一中略「昨夜の明かりは対馬丸が潜水艦にやられて沈む火だったんだ」とも言った。みんな啞然とした。『まさかあの対馬丸が…』言葉が続かなかった。」自身もその場に居るような緊張を覚える一文である。戦後、復興の時、首里高時代、文学へのあこがれ、登山に没頭した医学生の時、教育論、ウチナー諺、日々の暮らし、どれも読み応えがあり、文は人なりというけれども著者の寛容が伝わってくる。なかでも『クサティ』に思う」は、「ワラビンチャーヤ（子ども達は）、ウヤ クサティシワル（親

をクサティしてこそ）、ウフヤシク ナインドー（おだやかな心持ちになれるのだよ）」と祖母の言葉をひき、クサティ（後ろ盾）を論じるが、幾重にも著者の沖縄への愛情が感じられ、しみじみとする思いで読み終えた。



著者素描

城間政州（しろま まさくに）

1933年生、那覇市首里崎山町育ち

精神科医、城間医院院長

岡山大学精神科神経病理研究室出身

広島県府中総合病院精神科

兵庫県西宮市有馬病院

国立療養所琉球精神病院

1977年より現職

主なる所属団体

日本精神科診療所協会

沖縄外来精神科医会

日本精神分析学会

沖縄エッセイストクラブ

日本尊厳死協会

著書

メンタルヘルスを語る（平成2年 沖縄高速印刷）

こころの時代に寄せて（平成5年 那覇出版社）